

ひきこもりの人

在宅就労で自信

ひきこもりの人が無理なく働く方法として、ICT（情報通信技術）を使った在宅ワークが注目されている。外出し人と関わって就労するのは苦手でも、ひきこもりの人が収入を得る選択肢の一つになりそうだ。

「自分のペースで仕事ができるので、ありがたや道北、道東在住のひきこもり（45）は、平日午前10時から午後5時ほど、自宅でパソコンを使って作業する。民間企業のホームページ（HP）などを、高齢者や障害のある人なども不自由なく利用できるかチェックするのが主な仕事だ。吉谷さんは30代半ばから約5年間、自宅でひきこもった。2年前にNPO法人札幌チャレンジド（札幌）の支援を受け、在宅ワークとして現在の仕事を始めた。就労継続支援A型事業を展開する同法人で働く人のうち在宅ワークは17



こもり当事者だ。1日4～6時間を週3～5日働き、収入は月3万～10万円ほど。吉谷さんは「技術支援だけでなく、精神的な支援もあり、助かっている」と話す。同法人の佐藤美実理事は「当事者の中には自宅でパソコンを使う人も多く、扱いに慣れている」と指摘。だからこそ、精神面への配慮も大切になるという。「直接顔を合わせる面談も1～2カ月に1回行い、じかに話を

札幌のNPOなど支援 賛同企業広がり期待

聞いている。背中を押しすぎず『また失敗したくない』という不安を生ませないことが大事だ」と強調する。今秋、札幌市はソフトバンクと提携し、ひきこもりの人への就労支援を開始。道内の50代男性が11月から同社と雇用契約を結び、週3時間程度働いている。同社は2016年から週20時間未満から就業できる独自の「ショートタイムワーク制度」を導入。長時間働けなくても、その人の事情に合わせて就労できる制度で、障害のある人や育児、介護中の人の雇用につながっている。同社の地域CSR統括部（札幌）の高橋奈美担当課長は「道内の賛同企業が増えれば働き方の選択肢は広がる」と期待する。

当事者に合った在宅ワークをマッチングするオンラインサービスもある。職業適性検査の開発提供会社「Meta」道内で在宅ワークするひきこもり経験者（中央）とオンラインでコミュニケーションを図る札幌チャレンジドのスタッフ

同社の山田邦夫社長は「過去や未来で縛らず、他人とも比べず、自己肯定感を保ちながら就労につなげるのが重要。在宅ワークでお金を得る経験は貴重で、それが自信につながる」と話す。札幌市によると、ひきこもりの人は市内に約2万人と推計されている。市は来年度、パソコン技術向上のための講習会などを検討している。

ひきこもり支援に取り組むNPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク（札幌）の田中敦理事長は「当事者は既存の就労の枠組みになじめないことが多かった。今後は在宅ワークひきこもり者と就労をつなぐ架け橋として広がるのではないかと話している。」（鈴木雅人）